

# 今福龍太

そこで「で・に」生きるための、知のありか。

## フィールドワーク・セッション

©Ryuta Imafuku

2017/02/11/Sat  
at Matsuda Lab.

「フィールドワーク」とは、何だろう。

このレクチャー・シリーズ（予定）では、諸分野の前線から（広義の）“フィールドワーカー”をお迎えし、これまでの活動や足跡について語ってもらうと共に、その「フィールド」の見いだし方や読み解き方、そしてそのフィールドを通じて捉えられる《世界》についてディスカッションを行う。

Lecture 今福龍太

14:00-

群島のヴィジョン

15:30



Session 今福龍太 松田法子

15:45-

旅の明日の目標

16:30

——群島・薄墨色の文法・深い遊び



今福龍太（いまふく・りゅうた）

1955年、東京生まれ。文化人類学者、批評家。東京外国语大学教授。神奈川県湘南の汀に育ち、大学卒業後、1982年よりメキシコ、キューバ、ブラジルにて人類学的フィールドワークに従事。調査というよりは放浪と彷徨を重ね、場所にみずから身体を調律するための流儀を探りつけてきた。2001年から奄美群島にて巡礼型の野外学舎「奄美自由大学」を主宰。著書に『クレオール主義』『野性のテクノロジー』『ミニマ・グラシア——歴史と希望』『群島・世界論』『ブラジルのホモ・ルーデンス』『ジェロニモたちの方舟』『私たちは砂粒に還る』『ヘンリー・ソロー 野性の学舎』など多数。近刊予定に『原 - 写真論』『ハーフ・ブリード』『ブラジル映画史講義』など。



## フィールドワークセッション

そこ〔で・に〕生きるための、知のありか。

ル・クレジオと今福龍太

©Ryuta Imafuku

2017/02/11/Sat  
at Matsuda Lab. 14:00-16:30

群島のヴィジョン

群島のヴィジョンへと導かれるためには、なによりもまず、私たちの思考を海という流体を媒介にして空間的に拓いてゆく想像力が不可欠となる。近代の知の慣性的な認識作用のなかで、強く時間化されてしまった私たちの歴史意識を、あらたに珊瑚の海へと突き落とし、大洋と汀にはたらく水の攪拌と浸透の力によって空間化すること。意味の発生を、過去と現在を結ぶ通時的因果関係と合理的な説明体系に求めるのではなく、空間的な可塑性をもった具体的な広がりのなかでのものごとの偶発的な出逢いの詩学的な強度に求めること。このようにして私たちの目の前にあらわれる群島地図は、近代の時間性のなかで成型された歴史と記録への抑圧を、豊かな記憶と声がおりたたまれた場所への想像力へと解き放ってゆくだろう。

(今福龍太『群島・世界論』、2008)

旅の明日の目標 ——群島・薄墨色の文法・深い遊び

Caro Mané マネ、元気かい？ バイアからセアラへの旅は内陸のセルタンの荒野を横断するきびしい道のりだった。でもこうしてやってきたジュアゼイロは、なんて心奪われる土地だろう。ぼくの心は都会生活からすっかり離れ、いまは神と精霊が近くにいる。亡靈も生きていて、埃だらけの道をすべるようにさ迷い歩いている。薄暗がりには祈る老婆がきっと跪（ひざまず）いている。民を虐げる傍若無人の農園主に復讐しようと、ピストルを隠し持った義賊たちが酒場で相談している。教会から破門された神秘的な予言者が、貧しい人でうめつくされたあばら家で永遠とも思える説教を行っている。

マネ、きみのフチボルの天才的な脚があっても、この乾燥した荒野にまでボールを運んでくるのは難しいかも知れないね。ここにはボールではなく、きっと別の武器がいる。乾いた風がぼくにささやく。それは歌だ、と。陽が傾いたとき、どこからともなく擦（かす）れたヴィオランウの音が聴こえた。家畜が引きずる壊れかけた荷車の車輪がきしむような音だった。重荷で崖を滑り落ちた山羊のかすかな喚（うめ）きのようでもあった。ここセルタンの奥地では、夕暮れの猫の影でさえ痩せ馬のように見える。そんな風土を生きるための武器。それが歌だ。この乾燥したセルタンの土地は、有名無名の即興詩人（レベンチスタ）を数多く生みだしてきた。ぼくのお気に入りは盲のバラッド歌手、パタタイーヴァ・ド・アサレ。彼は「きみはそこで歌え、私はここで歌う」と宣言した。都市に生まれたものは街路を歌う。セルタンに生まれたものは、それがどれほど貧しく不毛でも、生まれ故郷の大地を歌う。学問を身につけ、科学を道具にするのもいい。けれどセルタンに生きる経験がなければ、上手に藁葺きの家をつくることはできない。畑仕事を知らないで、豆や果物を食べることができるかい。ここには美しいものを実現する幸運がある。セルタンを歌うには、セルタンで生きねばならない……。そう、だからマネ、ぼくもここにいるあいだは、人々とおなじように、ただひたすら毎日フェイジョンだけを食べる。夕べにはただひたすらムグンザーを吃ることにする。カンジッカの白いトウモロコシ粒が、牛乳、砂糖、ココナッツミルクのなかでふくらと柔らかくなっている。そこに赤い慈愛の粉が。ムグンザーは、肉桂の恩寵をいただいた白い幸せそのものだ。この味に慣れること。この味以外のものを求めようとしない謙虚な舌を持つこと。ぼくの明日の目標。

(今福龍太「オルフェウの受胎——ブラジルからの手紙」／瀬戸内人『渋谷敦志写真集 回帰するブラジル』、2016)